

優秀賞論文要旨

ジェンダー化されない主体の誕生

—村田沙耶香『コンビニ人間』論—

土 井 瑞 穂

本論では、村田沙耶香『コンビニ人間』の舞台がコンビニであることの意味と、主人公である古倉恵子が「コンビニ人間」として生きることを決意した要因について、ジェンダーの視座から考察したものである。

『コンビニ人間』の作中人物はジェンダー規範にとらわれ、それによって人間を〈普通〉と「異物」に選別している。第一章では、恵子が三六歳になっても就職も結婚もせずコンビニでアルバイトを続けていることに注目し、『コンビニ人間』における〈普通〉の人間の定義を明らかにした。恵子の周囲の人間が彼女を「異物」と認識するのは、就職や結婚をせずにコンビニで働いていることを知った時である。このことから、『コンビニ人間』における〈普通〉は、就職して働くか結婚して家庭を持つことだと考察した。また、恵子に恋愛経験がないと知った時の周囲の人間の戸惑いや、恵子に同棲する恋人ができたときと勘違いした時の友好的な反応にも注目した。これらの反応から、恵子が“女性”であると実感できる事象が発生した時、彼女を〈普通〉の人間だと認識していることがわかった。ジェンダー規範にとらわれた人物にとって、異性との恋愛経験があることは〈普通〉で、そうでない人間は同性愛者やアセクシャルであるという偏見が存在しているのだ。『コンビニ人間』に登場する多くの人物が、男性か女性という二分化した規範にとらわれていることがわかった。

一方で、物語の舞台がなぜコンビニエンスストアなのかに注目するとき、コンビニが規範の象徴として描かれている一方で、ジェンダー・レスで多様性を

受け入れる場として意味付けられていることにも気付く。第二章では、コンビニ店員の社会的評価が低いことに注目し、そのように評価される原因に社会が創り出した規範があることを明らかにした。コンビニに対する規範と〈普通〉の人間という規範は、社会が創り出したものである点で共通しているだろう。村田は、社会規範の象徴としてコンビニを描くことで、それを批判しているのだと考えた。第三章では、コンビニがジェンダーから抜け出した空間として描かれていることに注目した。性別関係なく皆が同じ「店員」という均等な存在になることができるコンビニは、ジェンダー化されない「中性的」な空間であるのだ。そんなジェンダー・レスなコンビニへと物語の最後に恵子が戻ることは、〈普通〉の人間という規範や男女という二分化したジェンダー規範から解放されることを意味していると考察した。村田は、コンビニ店員へと戻る恵子を描くことで、〈普通〉という規範に固執する人物や社会、さらに〈普通〉という指標自体を批判しているのだ。そして、「コンビニ人間」というジェンダー化されない社会規範から抜け出た新たな存在を誕生させたのだと結論付けた。

